

大 博物館だより

No. 19
1998. 4

津山郷土博物館



铸造児島高德像 本館蔵

像高78cm。コンクリート製の台座の上に立つ。元弘2年(1332)の院庄の故事(次頁参照)における児島高德の姿を描いたものである。甲冑の上に蓑笠を着け、右手を胸前で握り、左手に墨斗を持ち、背中に長剣を負う。ただし今墨斗と長剣は欠失している。そして、目をかっと開き、口をきりりと結んで右前方を凝視し、今まさに桜樹に10字の詩を書きつけんとするかの姿勢である。本像については作者や制作年代は不明であるが、当館蔵の児島高德像拓版木からある程度制作事情を推測することができる。

この版木は縦139cm、横30cmで、上半部に銘文、下半部上段に10字の詩、同下段に高德像を描いたものである。銘によると、これは文化9年(1812)6月津山藩の命により、一宮村観音寺保管の高さ2尺5寸(約76cm)の児島高德木像を模写したもので、文は小島広厚、書は太田貞幹、筆は広瀬台山、いずれも当時の津山藩を代表する文人である。この高德像は左手に墨斗をもつが、右腕は筆を持つがごとくに胸前に折曲げているのみである。当館蔵の高徳像版木は今一つあり、これには嘉永7年(1854)2月の年紀がある。像は前者を模写したものであるが、右手に筆を持っている点のみが異なっている。これは本来の姿を復元したものであろう。

铸造児島高德像は以上の版木高德像ときわめて類似している。なかでも、右手に筆を持っていない点で文化9年像に近い。よって、本像の制作は文化9年の版木制作と何らかの関連があるのではなからうか。

研究ノート

二つの院庄 — 館跡と構城跡 —

1

津山市神戸に所在する院庄館跡は、中世の美作守護の居館跡とされ、かつ後醍醐天皇の伝説地として著名である。現在、東西北の三方を土塁が巡っており、その規模は東西約150m、南北約250mを測る。そして、土塁の外内には「御館」「御館堀」「大門」などの小字名が遺存している。なお、現在一角の中心部に後醍醐天皇と児島高德を祀る作楽神社があるが、これは明治2年(1689)に創祀されたものである。

一方、津山市院庄にある院庄構城跡は、館跡の南約600mに位置する。通説では戦国時代を中心とする平城跡とされ、その起源を南北朝に溯るとする説もある。『森家先代実録』によると、その構造は内郭、外郭の二重からなり、内郭の規模は約90m四方、内堀の幅は約14~23mを測る。戦国時代の城郭は通常山城の形態をとるにもかかわらず、これは完全な平城であり、かつ規模、形状が館跡と類似している。史料が乏しく、かつ発掘調査も実施されていないので、その性格を明確にすることができないが、もし通説のごとく館跡が守護所であるとすれば、それと類似する構城跡も守護所の可能性がありはしないか。その場合、両者はどのような関係にあり、なにゆえにかくも近接して存在しているのか。このように院庄館跡と院庄構城跡についてはいろいろと疑問も多いが、美作の中世史の鍵となる遺跡と思われるので、現状での問題点を整理しておくことにしたい。

2

まず、院庄館跡については『太平記』巻4に関連史料がある。すなわち、元弘2年(1332)隠岐に配流途中の後醍醐天皇が院庄を宿所としたとき、備前住人児島高德がひそかにその庭の桜樹に「天莫空勾踐、時非無范蠡」の詩を書きつけ、天皇を激励したという。これが古来著名な院庄の故事である。その後、貞享5年(1688)津山森藩の家老長尾勝明が東大門跡とされる地点に院庄の碑を建て故事の顕彰をしている。『作陽誌』にも「後醍醐帝駐驛跡」として、方80間(約145m四方)の御館跡があり、かつて古桜のあった東大門跡に石標を立て、6町15間(約681m)の参道を設置したとある。この「御館跡」の東西規模は現状の土塁の東西幅とほぼ一致し、参道も出雲

往来から北進する約700mの南北道として現存する。

館跡は、前述のように東西北の各辺を土塁で画されているが、南辺は三角形に削り取られており、これは吉井川の旧河道によると思われる。なお、館跡の一角は条理遺構に沿って構築されている。大正11年院庄館跡(児島高德伝説地)として国の史跡に指定された。昭和48・49年と55・56年の2次にわたり津山市教育委員会が発掘調査を実施している。第1次調査は土塁上と、それに囲まれた内部に12箇所の特レンチを設定したもので、鎌倉時代の井戸1基などが検出された。第2次調査は館域の確定を目的として、土塁のほかに8箇所の特レンチを設定したもので、東土塁の東約33mの位置で幅約2.5mの南北溝が検出された。これらの調査は部分的のため館の全体像は明確でないが、現存土塁が鎌倉時代のものであり、その内部が館の中心部であること、館の外周は溝で取り囲まれていたことなどが推定されている(『史跡院庄館跡』津山市教育委員会、1981年)。

3

次に、院庄構城跡は南北朝時代に関連記事がある。すなわち、『太平記綱目』35に「山名伊豆守時氏弊ニ乗ジテ美作ニ発向ス。(中略)時氏ハ三千余騎ニテ直ニ国府ニ打入院庄城ヲセム」、『森家先代実録』巻5に「院の庄の古城ハ、貞治年中山名時氏居城之由、大河原民部と云人居申由」、『作陽誌』苦西郡山川部条にも赤松の将住井行義・渡辺某の両名が山名時氏と院庄で戦い討死したとある。これらの史料はいずれも近世の著作であるが、山陰の守護大名山名時氏の居城とする点で一致しており、院庄構城跡の起源は南北朝に溯るとみてよいだろう。ついで構城跡がみえるのは戦国末期にいたってである。『作陽誌』『森家先代実録』によると、天正(1573~92)末期には宇喜多氏の部将片山李允・同左馬助が在城したとされ、某年3月17日付けの中西三郎兵衛宛の毛利輝元書状にも院庄籠城のことがみえる(「牧山家文書」)。後者は年号を欠くが、内容からみて元龜2年(1571)頃とみられている(『美作古城史』第4輯、院庄城条)。慶長8年(1603)美作に入封した森忠政は当初院庄を本拠と定め構城の改築に着手したが、まもなく津山城に本拠を移した。『森家先代実録』によると、忠政入国時のその規模は、本丸50間(約90m)四方でその周囲に内堀がめぐり、さらにその外を外堀が囲んでいたという。内堀の規模は

東堀が幅9間・長38間、西堀幅13間・同長68間、南堀幅12間・同長54間、北堀幅8間・長38間とされる。寛永15年(1638)土塁を壊して田地に開墾された(『作陽誌』苫西郡古跡部条)。現状では比高2m程の高まりをなしている。

4

ところで、院庄館跡を美作の中世守護居館とするのが古来の通説である。その根拠は必ずしも万全ではないが、次のような状況証拠からすれば、美作の守護所が院庄にあったことは認めてよいだろう。①『太平記』によると、元弘2年後醍醐天皇が院庄を宿所としているが、これは院庄が守護所であったことを推測させる。②『作陽誌』苫西郡県邑部条に「作州府院庄」とある。③『作陽誌』苫西郡古跡部条によると、足利尊氏・直義兄弟の建立した安国寺の跡が神戸村南にあるとされているが、これは当時院庄に美作の政庁があったことを類推させる。

以上のうち、①の後醍醐天皇の宿所とした院庄は館跡とみてよいだろう。なぜなら津山藩家老長尾勝明によって建立された貞享5年の石碑が現地にあり、かつ発掘調査により館跡の年代も鎌倉時代を中心とする時期と判定されているからである。しかし、②以下の史料は必ずしも館跡を意味せず、むしろ②は構城跡を指すとみられる。前述のように、森忠政は美作入国にあたって、まず院庄構城に入った。『作陽誌』苫西郡県邑部条に「慶長八年、本源君入州、将仍旧貫以此地为府。居之歳余、事遂不果。既而津山为府、院庄初廢」とあるように、忠政は旧慣によって構城を政庁としようとしたとある。忠政は美濃出身の武将で、幕府による国替えによって美作一国を与えられたものである。したがって美作には何の基盤ももっていなかった。現に美作入国に際しては当地の土豪たちの少なからぬ抵抗があったらしい(『美作一国鏡』一)。しからば、院庄入城は、自己が美作の正統な支配者たることを誇示するためのデモンストレーションだったのではなからうか。とすれば、院庄構城は室町時代後期の美作守護所とみることができる。このことは南北朝時代の山名時氏の院庄在城に遡る可能性がある。貞治元年(1362)時氏は南朝に属して美作を制圧したが、貞治3年(1364)に至って幕府に降り、美作を含む5か国の守護職を与えられた(ただし正式の美作守護は子の義理)。しからば時氏の院庄在城は守護としての活動と考えら

れる。応永22年(1415)「播磨国矢野庄学衆方年貢等算用状」によると、前年美作守護赤松義則が院庄に御持人夫2人を賦課している(『教王護国寺文書』巻3)が、この院庄も構城の可能性が高い。

5

以上のように、館跡も構城跡もどちらも守護所であり、その時期は前者は鎌倉時代、後者は南北朝から室町時代と推定された。両者は地理的にきわめて近接しており、同時併存は考えがたいことからすれば、前者から後者へ移転したと理解すべきであろう。とすれば、その理由はなにか。それを説明する従来からの一説が洪水説である。すなわち、院庄館跡の南辺に洪水で削りとられた地形が認められるところから、洪水によって館の機能が崩壊したのにともない、それを南600mの構城の地へ移したとみるのである。しかし、ある時期洪水が館跡の南辺を襲ったことは認めてよいが、その時期が館跡から構城跡へ移転したとみられる14世紀頃とする証明は全くない。竹下順一の指摘するように、館跡南辺をえぐる洪水の地割りは同時に構城北辺をもえぐっている(『美作国府館構城下町の検証』1995年)。また中山神社旧社家中島氏旧蔵の『美作国内社寺郷邑見取図』のうち「神戸院庄之図」によれば、その洪水地割りは清晃川として描かれている。これらの地図には年紀を欠くものの、内容からみて江戸中期のものと思われる。このような事実からすれば、先の洪水はとうてい南北朝時代に溯りえず、おそらく江戸時代に入ってからのものであろう。

このように、守護所の移転が洪水によらないとすれば、その原因はなにか。館跡と構城跡が同じ美作守護所でありながら、両者の機能の相違に原因があるのではなからうか。鎌倉時代の守護の職務は、大犯三箇条と通称される大番催促、謀叛人・殺人者の追捕など軍事・警察権に限定され、国司のもつ一般民政権と相補しつつ国政を運営した。美作においても鎌倉時代は院庄の守護所と総社の国府が併存したと考えられる。一方、南北朝から室町時代にかけての守護は領国内の領域支配権を確立し、いわゆる守護大名化していった。そこでは前代からの軍事・警察権に加えて国衙の機能を吸収しつつ一国の全般的支配権を確立した。このような鎌倉時代と南北朝・室町時代の守護権力の内容の相違が、館跡から構城跡への政庁の移転をもたらした理由ではなかったか。

(漢 哲夫)

平成10年度 博物館行事予定

行事名 日程	展 覧 会	町 奉行日記を読むII	古 文 書 講 座	吾 妻 鏡 を 読 む	中 世 史 講 座	古 代 史 最 前 線	お か や ま 長 寿 学 園	夏 休 み 子 供 歴 史 教 室 弥 生 土 器 を つ く る	美 作 の 文 化 財 め ぐ り (友の会)
H10 3	3.14 企画展 城下町のくらし								
4	4.19								
5	4.25 企画展 詩の前衛から風狂の世界へ 5.24	● 5.14		● 5.20					● 5.17
6		● 6.11		● 6.17					
7		● 7. 9		● 7.15				●● 7.23・24	
8								● 8.18	
9		● 9.10		● 9. 9		● 9. 4			● 9.20
10	10.10 特別展 津山藩と小豆島	● 10. 8		● 10.21		● 9.18			
11	11. 8	● 11.12		● 11.18		● 10. 2			● 11. 8
12						● 10.16			
						● 10.30			
						● 11.13			
						● 11.27			
						● 12.11			
H11 1		● 1.14		● 1.20					
2		● 2.11		● 2.17					
3	3. 6	● 3.11		● 3.17					● 3. 7
4	企画展 津山藩主松平斉民 4.18								

<博物館入館案内>

- ・開館時間 午前9:00～午後5:00
- ・休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- ・入館料 小・中学生 100円(80円)
高校・大学生 150円(120円)
一 般 210円(160円)
※()は30人以上の団体

大 博物館だより No. 19

発行年月日 平成10年4月1日
編集・発行 津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ファックス(0868)23-9874
印刷 株式会社 三 勝

大 は津山松平藩の楳印で剣大といひ、現在津山市の市章となっている。